

成願寺

季報

133

令和4年8月18日
(2022年)

目次

「成願寺の梵鐘について(中編)」……………	1
中野たから幼稚園卒園遠足の報告……………	6
人生百歳時代「Successful Aging」を指すにはどう生きれば良いか……………	7
オマーン・スルタン国大使閣下ご来山……………	12

発行 多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711
制作 地人館

成願寺の梵鐘について(中編)

縦帯2(陰刻)

鐘楼堂施主 補山道佐庵主

椎名町之往人 慶徳屋藤右衛門再建

縦帯2には、鐘楼堂しょうろうどうの施主である補山道佐庵主と、再建した椎名町の慶徳屋藤右衛門が併記されています。慶徳屋というのは、江戸期から明治期にかけての豪商です。江戸幕府の御三卿の一つである清水徳川家の用人であつた村尾正靖が江戸附近の名所旧跡を探訪してまとめた『嘉陵紀行』に記されていることから、その知名度が推測されます。

『嘉陵紀行』の「上高田、氷川の社」の項に、

椎名町の入口一豪家あり、慶徳屋と名づく、この地に久しきもの也とぞ、穀物をあきなふ、

と紹介されています。また、同じく「石神井の道くさ」の項に、

椎名町慶徳屋が少し先に岐路有、北に行ば、上板橋に出、ここより西に行けば……

と道しるべの起点として案内されています。慶徳屋

秋彼岸中日法要「修証義奉読会」のお知らせ

九月二十三日(金) 秋分の日

十一時 受付始まり

十三時 法要

活け花について



華道家の宮腰あゆみ先生に活け花をお願いする事となりました。玄関、書院、本堂に活けていただきます。お参りの際はぜひ、美しい花々をご覧ください。

は成願寺の檀家だったという記録はなく、どういう経緯で鐘楼堂の施主に名を連ねることになったのかはよく分かりません。

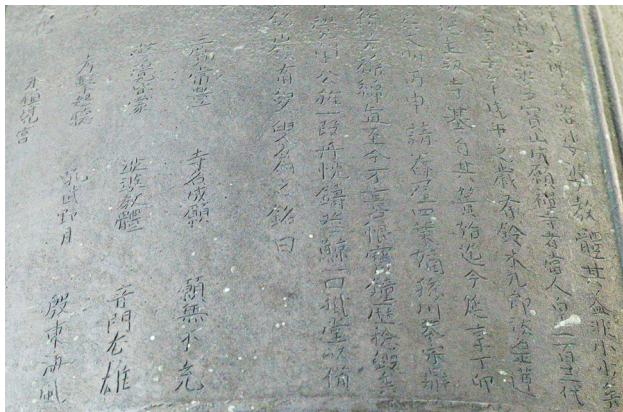
池の間2には梵鐘（新）の由緒書きが記されています。

池の間2（陰刻）

鐘之於「釈門」。古佛法器。娑婆教体。其益非「少」矣。／武州多摩郡中野莊多寶山成願寺者。当人皇「一百三代」／後花園帝永享十年戊午之歲。有「鈴木九郎法名正蓮」／居士。為「功德主」創「寺基」。自「其簣始」迄「今延享丁卯」／實「三百九年」矣。文明丙申。請「春屋四葉嫡孫川庵宗鼎」／禪師。為「始祖」。聯芳綿綿。直至「今不」衰。只恨宝鐘歷「檢毀」矣。／茲歲山主声覚聞公旌「一段丹沈」。鑄「華鯨一口」。掛「堂」。以備「晨昏」。遂問「於銘嶺南叟」。叟為「銘」曰。
山称「多寶」。三宝常豊。寺名「成願」。願無「不」充。／法器重修。警「覚昏蒙」。娑婆教体。音門「尤」雄。／無情說法。考擊起「聴」。吼「武野月」。殷東海風。／以弼「大化」。永鎮「梵宮」。

意識すると以下ようになります。

仏門において鐘は古くから必要とされる仏の宝器である。庶民に対する教えの効果は、決して少なくはない。



武蔵国多摩郡中野の多寶山成願寺は、後花園天皇の代、永享十年戊午（一四三八）の年、鈴木九郎法名正蓮居士という者がいた。三宝（仏法僧）に供養するため、寺の基礎を作った。その時から現在の延享四年丁卯（一七七七）まで三百九年が経った。
文明八年丙申（一四七六）、春

屋宗能禪師から四代目の嫡孫川庵宗鼎禪師をお招きして初代住職とした。以来営々と今に到るまで衰えることはなかった。ただ残念なことに長い年月の内に梵鐘（旧）が失われてしまった。真心の深さもありかな声覺了聞師が十二世住職の年、梵鐘を新たに鑄りて鐘樓堂に安置した。こうして朝夕の時報に備えた。さらに長老に銘の文を請うた。長老が以下のような銘を作った。

山号を多寶山と称して仏法僧を敬い、寺号を成願寺と名付け願いが満たされないことはない。梵鐘を新たに作って人々の迷いを覚まさせ、世の中に教えを広め、梵鐘の雄々しく鳴って、仏法（真理）を説く。その音武蔵野の野に響き、東海に響き渡り、大いなる教化を助け、永く寺院を守る。

縦帯3 撞坐（陽鑄）

施主淀橋町

井元次郎兵衛恭義



縦帯1の真裏に陽鑄されており、施主の貢献度の深さが感じられます。淀橋町（旧中野村小字淀橋、現在の中野坂下、旧本町通一丁目）井元次郎兵衛恭義

によって寄進されたものです。

池の間3（陽鑄）

武蔵国多摩郡江府之城西中野

多寶山成願禪寺

十二世聲覺了聞叟代

延享四丁卯年九月吉日

池の間1にも記したように、

延享四丁（一七四七）には多寶

山成願寺が正式名称となっていることが分かります。



縦帯4（陰刻）

鑄物師神田之住 小幡内匠藤原勝行作

縦帯4の銘に、この梵鐘を作成した鑄物師の名前が「鑄物師神田之住 小幡内匠藤原勝行作」と陰刻されています。小幡内匠藤原勝行作については、次ページで紹介いたします。

池の間4（陰刻）

【二段目】

涼清院風窓浄薫信士／仲岸院□山宗玄信士／一翁元

水信士／臨蓍妙終信女／露山淨白信士／賀岩栄春信女／桃元□花信女／智明禪童女／智岳清印法尼

【三段目】

心窓寿法大師／英嶽隨信□庵／泰宗良靈居士／大心白仙禪定門／保岩貞寿禪定尼／菊芳常月信士／久空妙昌信女／心啓即生是一信士／法照院慈觀信士／白雲妙圭信女／栄岳宗功信士／呉峯宗雪信士／曹室妙溪信女／寿山宗永信女／沢峯寿慶信士／即巖是空居士／風室貞春大師

一段目があいていることから、前号で紹介した池の間1の続きの戒名と考えられます。

江戸の鋳物師

縦帯4に彫られていた「鋳物師神田之住 小幡内匠 藤原勝行作」について詳しくご紹介します。

江戸の鋳物は、徳川家康が入府の時に築城用の金物や寺院の梵鐘や灯籠、擬宝珠、その他生活必需品の鍋、鍬などの農具、茶の湯釜などを造らせるために下野国佐野天明（栃木県佐野市）から六人の鋳物師を招聘したことから本格的に始まります。

佐野天明の鋳物は、天慶二年（九三九）に、平将門を討ったことで有名な藤原秀郷が、河内国丹南郡から鋳物師を連れてきて、武器などを作らせたという古い歴史を持っています。

佐野天明から来た六人の鋳物師たちは神田に作業場を構え、やがて鍋町、鍛冶町という町名が生まれました。六人の鋳物師の子孫に、椎名伊予守、小沼播磨守、小沼八郎兵衛、長谷川庄左衛門等が知られています。江戸時代を通じて活躍した鋳物師は、ほとんど神田に住して活動しています。

成願寺の鐘を製作した小幡内匠藤原勝行も神田鍋町に仕事場を持っていました。

その他、粉川丹後守、西村和泉守、太田近江大掾等、五十数名の名前が見られますが、これらは、江戸の開発が落ち着いた頃から京都や近江、紀州他各地から集まってきた鋳物師達も多かったと思われるます。神田に住せず独自に活躍している鋳物師のグループもありました。宇多川を名乗るグループや田中丹波守のグループです。

江戸時代初期は、築城用の金物や釜・鍋・鏡等の必需品が中心でしたが、やがて寺院や神社の鰐口や欄干を飾る擬宝珠や将軍の廟所などに寄進する銅燈

台なども作られるようになり、徐々に梵鐘も多く作られるようになりました。特に梵鐘が多く作られ始めたのは、一六六〇年代頃からで、一七〇〇年頃から数十年間がピークであり、一七七〇年頃から少しずつ終熄して、天水桶や香炉・銅仏の製作や、地方寺院の梵鐘製作へと変遷していく流れが観察されます。

鋳物師・小幡内匠藤原勝行

工芸家として初の文化勲章を受章した鋳金工芸作家・香取秀真（^{ほつま}一八七四―一九五四）の研究によると、小幡内匠は正徳二年（一七一二）から明和六年（一七六九）までの五十七年間で三十九件の作品を残しているようです。そのうち、主立った寺院の一覧をまとめてみます。

増上寺	浄土宗	芝	正徳二年（一七一二）
功運寺	曹洞宗	三田	享保五年（一七二〇）
西方寺	浄土宗	四ツ谷	享保五年（一七二〇）
長昌寺	日蓮宗	浅草	享保五年（一七二〇）
長善寺	曹洞宗	四ツ谷	元文元年（一七三六）
崇禅寺	臨済宗	群馬県	元文五年（一七四〇）

玄信寺	浄土宗	深川	寛保二年（一七四二）
長圓寺	浄土宗	下高輪	寛保三年（一七四三）
寿昌寺	臨済宗	大崎	慶安二年（一六四九）
〃	〃		
靈巖寺	浄土宗	深川	寛保三年（一七四三）
瑞聖寺	黄檗宗	白金	延享元年（一七四四）
成願寺	曹洞宗	中野	延享二年（一七四五）
長源寺	一向宗	駒込	延享四年（一七四七）
無量院	浄土宗	小石川	寛延四年（一七五一）
聖輪寺	真言宗	千駄ヶ谷	宝暦八年（一七五八）
教善寺	浄土宗	麻布	明和二年（一七六五）
理性寺	日蓮宗	四ツ谷	明和五年（一七六八）
			明和六年（一七六九）

何れも錚々たる寺院です。

五十七年間の活動歴があるということは、八十歳くらいの長寿であれば、一代でなした業績とも思えますが、小幡内匠の名前を引き継いで親子二代での業績だったとも考えられます。成願寺の梵鐘を製作したのは、芝増上寺へ奉納した銅燈台一对、正徳二年（一七一二）から三十五年後となっていますので、二代目の作とも考えられます。

（以下次号）

中野たから幼稚園卒園遠足の報告

去る三月七日（月）、年長さんの卒園遠足が行われました。今年は三年ぶりに大本山總持寺を参拝させていただきました。

普段より早めに登園した年長さん。クラスごとに大型バス二台に乗り込むと、見送りのご父母に手を振って出発。山手トンネルから一路、鶴見の總持寺を目指します。車内ではクイズを楽しんだり、東海道新幹線の車両基地や、羽田空港を車窓に眺めて、一時間ほどで到着しました。

総受付・香積台こうしやくだいの目の前でバスを降りると、知客しきゃく（受付）の大庭淳亮老師が迎えてくださいました。

案内してくださる雲水さん（修行僧）に導かれて、



お焼香をして合掌



大僧堂のなかを見学



心静かに坐る子どもたち



主事先生も子どもたちががんばりました。

おしゃべりせずに二列で長い廊下を進みます。最初にご案内いただいたのは、たたみ千畳敷の広さを誇る大祖堂（本堂）で、いつものように、三本の指でお香をつまみ、お焼香をさせていただきました。

続いてご案内いただいたのは、大僧堂。雲水さんたちが坐禅を組み、食事をいただき、就寝するお堂で、修行生活の中心となる場です。普段は拝見することはできませんが、特別に見学させていただきました。場所を衆寮しゅりょうに移すと、いよいよ坐禅修行です。いつも成願寺の本堂でしていますが、こちらでは単に一段高くなったところに坐ります。参禅室長の花和浩明老師にご指導をいただきました。周りを気にする子もいましたが、作法に則り坐っているうち



に、いつものように集中して坐ることができました。次は百間廊下のお掃除です。禪宗ではお掃除も立派な修行の一つ。長さ百六十四メートルという長い廊下を、端から端までぴかぴかになるように雑巾がけをしました。

広い和室をお借りして、ご父母が持たせてくださったお弁当をいただきます。食事の心得「五観の偈」を元氣いっぱいにお唱えして「いただきます!」。

最後に渡辺啓司監院老師が、「今日は坐禅もお掃除もとってもよくがんばりましたね」と、みんなを褒めにくてくださいました。

大祖堂の前で記念撮影を済ませて、幼稚園への帰路につきました。



人生百歳時代。

「Successful Aging」を目指すには、どう生きれば良いか。

医学博士 井上肇

去る、四月十六日（土）、旧幼稚園において元聖路加国際病院整形外科部長・リハビリ科部長で医学博士の井上肇先生が講演をされました。檀信徒の皆さまにも参考になるお話でしたので、季報向けにご寄稿いただきました。

人間誰でも老化し、そして死を迎えます。しかし老化にも「質」があります。

現在は「百歳時代」と喧伝されていますが、その内容は満足できるものでしょうか？「質の高い高齢期」を迎えるには、どうしたら良いのか？ その

答えが、「百歳時代」に向けての「意識武装」「知識武装」「技術武装」です。

井上肇先生
なお、本稿は今号・
次号の二部に分かれ
ております。次稿は

「なぜ健康格差が生まれるか？」等、より具体的な話になります。ご期待ください。

さて、まずこの数字を見て下さい。何の数字でしょうか？

- ① 男性九年・女性十二年
- ② 六百万人
- ③ 百四十三兆円
- ④ 百七兆円
- ⑤ 四十三兆円
- ⑥ 九十四万円と二十二万円
- ⑦ 十一兆円

正解は、

- ① 死亡する前に要支援・介護状態になる期間の平均値。
- ② 認知症者の数。
- ③ 金銭管理が出来なくなった認知症者の金融資産。
- ④ 国家予算（二〇二二年度）。

特に①ですが、これは「平均値」です。つまり読者の方々が今普通の生活をしていれば皆さんは亡くなる前の約十年間は自立出来ない状態になるという事実です。他人ごとではないのです。

③の認知症患者の「行方不明の金融資産」は、国家予算を大きく上回っているという恐ろしい現実です。決して質の高い高齢期とは言えない状況です。

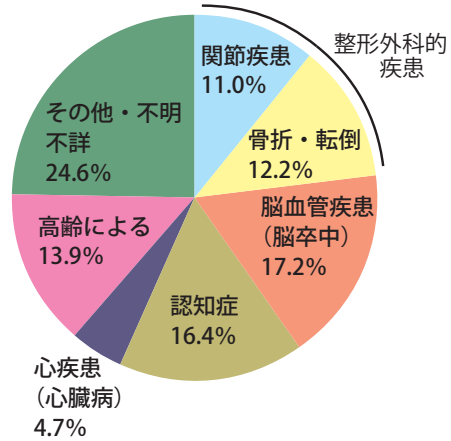
⑤は年間国民医療費です。国家予算と比べて下さい。こんな状態は持続可能とはとても言えません。

⑥の九十四万円は、七十五歳以上の一人当たりの年間医療費。二十二万円は、七十四歳以下の一人当たりの年間医療費です。最後の十年間で莫大な医療費を消費していることが分かります。

⑦は年間総介護費、二十年間で三倍に膨張しています。今後も急速膨張します。

次に円グラフを見て下さい。何のグラフでしょうか？ そうです。要支援・介護になる原因を示したものです。運動器障害（整形外科）＋脳血管障害＋認知症が全体の六割を占めていると言う事が分ります。この事は同時に日本の国民皆保険制度・介護保険制度を財政面から破壊する事を意味します。

この度成願寺小林貢人方丈が成願寺季報への投稿の機会を与えて下さいました。読者の方はまずこの日本の現状を認識したうえで以下の文章をお読み頂きたく存じます。



65 歳以上で介護が必要となった主な原因

出典：厚生労働省「国民生活基礎調査」(平成 25 年)

本文の内容は、自己紹介と、

- ①両手の会の紹介
 - ②老化にも質がある。人生百歳時代の明暗
 - ③百歳時代への「技術武装」。何故「両手書き」なのか？
 - ④両手書き訓練法
 - ⑤百歳時代への「意識武装」
 - ⑥百歳時代への「知識武装」
 - ⑦今後の展望と夢
- です。以下、本文では「利き手は右手」という前提で話を進めます。

さて、筆者は昭和八（一九三三）年東京世田谷生まれ。男ばかりの五人兄弟の末っ子です。疎開をせず東京に留まったので空襲を最初から最後までこの目で見ました。幸い家はギリギリ焼けないで済みました。敗戦で五大列強から三等国になった惨めさも味わいました。

食べ物は勿論の事、すべてのものがなくなった辛さも味わいましたが、この苦難が私の成長に大きい力を与えてくれた事が今になってわかるようになりました。将に「苦難は天からの贈り物」なのです。貧しい戦後時代の中、医師になってから幸いにしてイタリア政府のお金でイタリアに、その後東京都のお金でアメリカに留学する機会を得ました。為替が1\$三百六十円、国外持ち出し限度額は二万円＋二百ドルの時代です。しかし貧乏で困ればよその国でも必ず出会いはある事も学びました。

今、この年になって私が一番感謝している人は私に苦難を与えてくれた人、そして苦難そのものです。

「両手の会」の紹介

さて冒頭で述べた現状に見られる諸々の「負の現実」を抑制し、同時に「人生末節十余年の自立不能

生活」の惨めさを避け「Successful aging」を実現させる原動力になる事を願って創設したのが「両手の会」です。二〇一六年の事です。

●活動内容

健康・病氣・災害・外傷に関する「知識武装」「意識武装」「技術武装」の会得。これは結果として医療費削減に繋がり、財政破産寸前の国民皆保険制度をすくいます。

この様な話をするとき必ず反発する人が居ます。「これは高齢者向けの話だ。俺はまだそんなじゃない」。しかし考えてみてください。健康維持のため自分を変化させるには、巨大なエネルギーが必要です。元氣な内にしか出来ないのです。氣が付いた時は既に会得能力が失せている事を知って下さい。

●会開設のきっかけ

①開設のきっかけは三十年も前です。脳梗塞などで「利き手機能」を失った場合は、「反対の手の利き手化訓練」行うのですが、これが当時の方法では全く上手く行かない。努力対効果が極めて低い。患者も作業療法士もこんなものだと言っている様

な状況でした。

脳血管障害で治療中の患者数は百十五万人ですが、それから三十数年たった今でも利き手麻痺患者の治療法は進化して居ないという現実を突きつけられました。このまま放置できない。ブレークスルー的新療法の開発は急務である。そこでひらめいたのが「両手使い」です。これがきっかけの一つです。

これが現行治療法に比べいかに優れているかについては次稿で紹介します。

②中学・高校の同窓会の席で多くの友人が抱えている「病氣の不安」「健康維持の不安」「老後生活への不安」「災害対処の不安」(将来皆、災害弱者になる)の払拭。

③認知症患者の急増への危機感。

④健康保険制度の財政破綻への危機感。

⑤国家の衰退への危機感。

●会のモットー

①やったことが無い、だからやる。

②ちよつと辛い、だからやる。

③総ては元氣な内に。

●技術武装の具体策

- ①左手での書字訓練。
 - ②左手による日常生活動作の訓練。
 - ③左手四十字日記の継続。天気・昼食の中身・その日の代表的出来事の三点を記録。
 - ④会員によるプレゼンテーションの義務化（詳細は後編で）。
- 何故これらが重要なのか？ も後編で詳しく解説します。

●どんな人がボケやすいか？

- ①新しい試みを敬遠する人。子供は飛びつきます。だから成長する。
- ②「安楽」「漫然」に流れる人。
- ③過去にこだわる人。

二〇一五年のボストン大学の研究でも「認知症患者の危険因子」の一番は「低教育」と判明し、生涯学習を続ける事が重要と結論付けています。好奇心を失わない緊張感です。

●年を取るとやる事が一杯

両手の会では「ボケ防止八策」を掲げています。

①新しい事を始める（少し難しい事）。

②毎日筋トレ（身の丈に合った）主に肩・腰・膝の周辺筋。

③人と接する。

④「両手使い能力」の獲得。

⑤完全咬合できる歯の維持（記憶保持に関係ある脳の「海馬」部分の刺激）。

⑥視力・聴力の保全⇨情報収集力の維持。

⑦規則正しい生活（曜日認識のタスク）。

⑧ボケる前に始める。

●加齢と言う「未知の世界にどう対峙する？」

①加齢と言う未知の世界は、好奇心を以て当たれば「興味」となる。

②加齢と言う未知の世界は、恐怖心を以て当たれば「不安」となる。

好奇心を失った時、あとは老化にまっしぐらです。老化とは何でしょう？ それは「過去を捨てない事」です。捨てないと新しい出会いはありません。人生には「過去を捨てるべき時が三回ある」のです。

さて今回はページの都合で此処までです。後編で

は「両手使い」方式がどの点で現行治療法に勝っているのか? 「両手書き」訓練の仕方、何故「書字」なのか? の解説、「意識武装」「知識武装」「何故健康格差が生まれるか?」など、より具体的な話をお伝えします。更に近年急速な発展を遂げている「遺伝子操作」の明暗についてお話を進めます。

(以下次号)

◎オマーン・スルタン国大使閣下ご来山

去る、五月三十一日(火)、オマーン・スルタン国特命全権大使モハメッド・サイド・ハリファ・アル・ブサイディ閣下が来山されました。



到着された大使と、元気に歓迎する園児



大使を囲んで記念撮影

当山住職は日本オマーンクラブ(相互理解を深めるための友好団体)の会員で、長年に渡り、オマーン留学生と日本の学生の交流の場を提供したり、お寺の宿泊体験、坐禅体験などに協力してきました。

今年は日本・オマーン外交関係樹立五十周年にあたることから、オマーン・スルタン国が特別に用意された記念品を大使自らがお届けくださいました。

大使の車が境内に入ると、中野たから幼稚園の子どもたちとご父母、先生方がお手製の国旗を振ってお出迎え。大使も手を振り返されて、親しく声をかけてくださいました。



歓談の様子(中央が大使)

書院では大使と住職親子三代で歓談。大使から「留学生たちは成願寺を日本のもう一つの家のように思っています。彼らは、成願寺ではじめて触れた日本の文化がたくさんありました。彼らも私も、成願寺のみなさんの親切にいつも感謝しています」とのお言葉とともに記念のお品物を頂戴しました。